歓楽街鶴巻

小諸 鶴巻繁栄の礎

小宮山荘助翁

しのがたり

鶴巻鉱泉

小諸キネマ倶楽部

大豆粕粉砕機

小宮山荘助翁

明治から昭和にかけての日本は、いくつもの戦争や生活文化の変容、まさに混沌とも言える時代の中、小宮山荘助は小諸の町に多大な功績を残した人物でした。

明治二年、小諸新町の齋藤家に生まれた荘助は、十四歳の時に小諸で代々農具を専門に扱っていた小宮山家が営む个小宮山佐市鍛冶へ弟子入りしました。やがて、小宮山家の養子となり長女のいちと結婚しました。その後、分家独立して鍛冶職人となりました。

荘助は生まれつきの几帳面さと仕事好きの性格で、新しい機械の研究開発に取り組むなど、多忙な日々を送っていました。荘助が四十一歳の時、小宮山式大豆粕粉砕機を考案し、専売特許を取得して売り出しました。大阪天王寺で開催された発明品博覧会にも出品したこの大豆粕粉砕機は、当時の農業肥料業界にとって革命的な発明でした。

明治期の鶴巻は一帯が畑でした。大正三年、荘助が四十五歳の時、工場の敷地から出た湧水をきっかけに、荘助はここに浴場「鶴巻鉱泉」を開設し、新しい道路、電話、街灯を誘致して二年後、鶴巻町を興しました。さらに荘助は鶴巻に飲食店、芸妓置屋を設置し、活動映画を上映する鶴巻館を設立しました。こうして鶴巻は歓楽街として発展していきました。

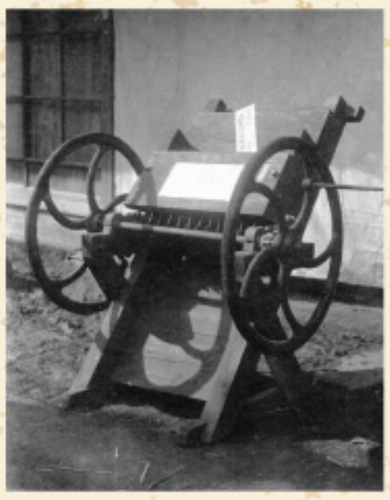
昭和になり、小諸の一大製糸会社であった純水館からボイラー機械を任されていた荘助は、事業拡大を図って南町に株式会社小諸鉄工所を設立しました。小諸鉄工所は東信地方随一と言われ、各方面から期待が寄せられました。荘助はこの頃、小諸町町会議員や鶴巻区長として地域に貢献するなど、さまざまな代表職を務めました。

昭和十三年十一月五日、体調を崩し病の床に伏した荘助は、六十九歳の生涯を閉じました。

鶴巻町には翁の功績を称えて建てられた顕彰碑があります。碑文と裏書きは、純水館当主で初代小諸市長の小山邦太郎氏によるものです。

▲ 小宮山荘助翁の碑（鶴巻町）

小宮山式大豆粕粉砕機



▲ 大豆粕粉砕機 初期型

▲ 西原土屋（法被の文字から）にて。左から２人目が荘助。

明治・大正の頃、日本は満州から肥料用の「大豆粕」を大量に輸入していました。

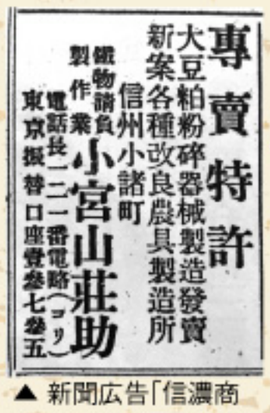
満州で大量に作られる大豆油の搾りかすは、大きな円盤状でとても重く固い物でしたが、国内では重要な窒素肥料として利用されていました。しかし固く厚い板粕を細かく砕くということは大変な作業で、農家の人たちも手をやいていました。

そこに目をつけた荘助はこれを機械で粉砕することを考え、ついに「小宮山式大豆粕粉砕機」を考案し、明治四十三年に専売特許を取得しました。（特許第一八一五八号）

荘助の大豆粕粉砕機は農業肥料界の革命的な発明といわれました。

▶男性の足元に積んである円盤状の物が大豆粕。これを器械に投入し、手回しで粉砕する初期型。

▲ 東信肥料株式会社 小諸本町（明治 44 年８月）。右から３人目が荘助。



専賣特許
大豆粕粉砕器械製造發賣
新案各種改良農具製造所
信州小諸町
鐵物請負製作業
小宮山莊助
電話長二一番電略（コリ）
東京振替口座貴巻七巻五

▲ 新聞広告「信濃商業新報」（大正元年期）

発明品博覧会に出品

大正三年、第二回発明品博覧会が大阪天王寺公園で開かれました。全国から発明品を集めた博覧会で、荘助は「小宮山式大豆粕粉砕機」を出品し、会場で大いに紹介しました。

荘助の日記には、『三月九日、小諸を朝九時に出発し、汽車で篠ノ井、名古屋を乗り継ぎ、翌朝五時半に大阪に到着。そこから乗合バスで移動し、天王寺に到着したのは朝七時で、そのまま天王寺駅前の和泉屋旅舎に宿泊』とあります。

この当時の大阪天王寺は、通天閣を中心とする一大商業施設「新世界ルナパーク」が完成した直後でした。あたかも欧米の雰囲気をまねた建造物や移動するためのロープウェイなど、会場の雰囲気や周辺の娯楽施設の豪華さは、誰もが想像を超えるものでした。

博覧会は天王寺公園の勧業館と美術館で開催され、出品数約２６００点（その内特許は７８９点）、入場料は大人10銭、小人５銭。開催期間は三月十五日から五月十三日までの長期間の大きなイベントでした。

こうして大豆粕粉砕機の売れ行きは国内はもちろん満州、台湾にまでおよびました。

▼ 大阪天王寺の新世界ルナパーク。

四十六

械（福岡）今泉德三●救命艇（東京）田中奬●千瓢剝製機（栃木）渡邊次郎●催青機（群馬）篠原寅吉●町井式製簇機（長野）町井由太郎●理科用簡易實驗組立機械（東京）日本教育品製造所●間宮式加減算器（同）間宮勝三郎●大豆粕粉砕機械（長野）小宮山莊助●改良薬切機（栃木）淺野久吾●電氣諸機械（東京）芝浦製作所●廻轉稻扱機（同）西谷繁藏●精米機（長野）平山喜内●薬切機及農具（栃木）農具製造合資會社●桑剪機（群馬）福島元助●郵便輜生地製造機（三重）安川重太郎●カゾリン發動機、喞筒（大阪）小澤半助●寫眞機械（同）桑田正三郎●朝日飛行機（同）谷田純一●莫大小機械、精米機（同）大西與之助●機械及（山形）伊藤喜平次●足袋裾付

清水商會●大正式稻麥扱機
新島森造●精米機（東京）松本
會社●バランス式電話機其他
大阪）千代田組支店●乾電池
（同）●改良印刷機（佐賀）川原
氣機械類（東京）サンデン電氣
谷式足踏製打機（大阪）妻谷重
●瓦製造機械（堺）森分福太郎
（香川）加地茂治郎●米穀精撰
大阪）山原恒吉●阪東式調帶

四十七

▲「第２回発明品博覧会案内」（引用：国立国会図書館デジタルコレクション）

鶴巻鉱泉 鶴巻の湯

鶴巻町は北国街道筋与良町の南側を並走する街筋。しかし、大正前までは水田と畑とで一軒の家もなく、そこから見渡す田圃には信越線の黒橋が見られ、一本松を経て千曲川断崖越しに川辺村の家々が見える広い耕作地でした。

大正三年、荘助が資材置場の建築工事を進めていたところ、田圃から大量の水が湧き出しました。荘助はそれを「鶴巻鉱泉」と名付け、地元の人々に利用してもらうように浴場を建設しました。

平成二十年代まで営業した鶴巻の湯は、小諸で最後の銭湯でした。

平成 20 年、営業していた頃の写真。当時の店看板や男湯女湯の札、煙突がそのまま残る。（※現在は個人宅）

（写真提供：中村雅之様／ブログ「風呂屋の煙突」より）

小宮山荘助翁の碑

▲除幕式には多くの来賓や親戚等が参列した。除幕は孫の義雄さん（当時 12 歳、ネクタイ姿）が行なった。

荘助の二十三回忌となる昭和三十五年十二月一日、翁の功績をたたえ、二メートルあまりの大きさの仙台石で頌徳碑を建て、盛大な除幕式を行いました。この場所にはかつて、荘助の鉄工場がありました。

▲現在の公徳碑。向かいには鶴巻の湯、その右奥には小宮山酒店が見える。

◆碑の裏に刻まれた小山邦太郎の書

翁は明治二年小諸町に生れ若くして鐵工業を志し幾多の辛酸をなめ遂に天與の才能と不拔の意志とを以て克く專賣特許小宮山式豆粕粉碎機の完成を致し農民労力の節約に益する所多大なるものであった翁は性来豪快で温容亦玉の如く推されて町會議員或は区長など公職に盡す事将に半世の長きに及び別けて其の昔此處の畑地をトして鐵工場を建設偶々鑛泉を發見して大衆浴場を興し旺んに鶴巻町繁栄の礎を築かれた其の功績は是に鶴巻開發の元祖として永へに後世に傳ふ可きものである茲に先人の徳行を偲び有志相謀りて此の碑を建てた次第である

昭和三十五年十一月 吉晨
参議院議員 小山邦太郎 謹書

鶴巻館・小諸キネマ倶楽部

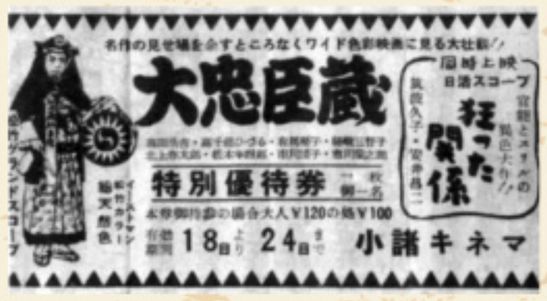
▲ 乃木将軍上映の小諸キネマ倶楽部。

鶴巻を一大繁華街にしたいと考えた荘助は、大正九年、鶴巻に演芸場を興しました。荘助五十一歳の時でした。

このとき設立した株式会社鶴巻館は、大正十三年の全国映画館便覧に、県下二十三軒の中「鶴巻館・北佐久郡小諸町」として掲載されています。

その後、映画館は志村歌次郎氏に鶴巻演芸館として引き継がれ、松竹系の常設映画館「小諸キネマ倶楽部」となって、小諸住民の娯楽の殿堂として時代を生き抜きました。全盛期のキネマ倶楽部の宣伝方法は奇抜で、宣伝ビラを百円札紙幣に似せた偽札事件や、召集令状に似せて各戸に配布するなど、世間を驚かせていました。

しかし、やがて来るテレビジョン普及の流れには勝てず、昭和六十年頃閉館となりましたが、当時の上映作品と共に、小諸キネマは懐かしい記憶となっています。



▲ 昭和 32 年、百円札を真似たキネマ倶楽部のチラシ。（左が裏、右が表）（小諸市誌 近・現代篇 P.320）

小山邦太郎氏と荘助

▲ 碑の除幕式で祝詞を述べる小山邦太郎氏（昭和 35 年）
「小宮山さんはいまこの盛んな町を見、大いによろこんでおられるだろう」と挨拶した。

小諸の製糸業、純水館の発展に寄与した小山邦太郎氏は、大正十二年から十八年間衆議院議員、昭和三十一年から十七年間参議院議員として国政に参与し、公共の福社の増進、文化・産業・経済の発展などに著しい功績をあげた人物で、やがて昭和二十九年には初代小諸市長となり、今日の小諸市の基礎を築いた人物です。

邦太郎氏は大正十三年、三十五歳のときに純水館の五つの工場と佐久蚕種株式会社を統合し、株式会社純水館を設立し社長に就任しました。

昭和のはじめ、全盛期ともいえる純水館は一九六〇釜、職工数二一五〇人の製糸会社となっており、長野県内において片倉、郡是、鐘紡と共に四大製糸企業の一つとして一大勢力を誇っており、その成長に伴う設備の拡張は、小諸の鉄工所を総動員しても追いつかないほどでした。

荘助の鉄工場も純水館の機械設備の一部を担当しており、いくら働いても間に合わないほど多忙を極めました。しかも鶴巻にあった荘助の作業場は手狭であり、いよいよ純水館の要望に応えられなくなってきました。

そうして工場の拡張が急務となった荘助は昭和二年、小諸駅を目下に見る南町に株式会社小諸鉄工所を設立しました。この小諸鉄工所は荘助が社長となり、小山邦太郎氏を顧問に迎えました。そして実質的な運営は荘助の息子練三に任せていました。

荘助と錬三の小諸鉄工所は、諏訪の大手鉄工所のような会社でなければ造れない大型のボイラーを製造して純水館に納入する事ができました。

製糸工場は大量の蒸気を必要としたので、錬三は得意な計算尺を用いて、径八尺、全長二十一尺もあるランカッシャーボイラーを設計し、短納期で製造から据え付けをしました。

これにより小諸鉄工所は、純水館の小山邦太郎氏から厚い信頼を受けたのです。

息子の錬三と荘助

小宮山錬三は、荘助といちの間に生まれ、父荘助が鉄工業を盛んにしたいとの願いから、息子たちを金偏（かねへん）の錬三、鋼三と命名しました。母いちは錬三が六歳の時に亡くなり、早くに母を失った寂しさからか、錬三はキリスト教の教えに救いを求めるようになりました。

高等科時代、勉強好きで、肉体的にも人一倍強く健康でした。千曲川や高い山や自然が大好きだった錬三は、浅間山へは一日に2回も登ることがありました。

大正八年、十八歳の時、東京高等工業学校（現在の東京工業大学）の附属職工徒弟学校で本格的に工業技術を習得しました。ここで学んだボイラーの設計、橋梁の設計、強度計算などの技術は、錬三の以後の仕事に発揮され、鉄骨製の火の見櫓や、大久保の鉄骨の吊橋（昭和八年千曲川）などの実績に繋がりました。

また、昭和二年、荘助が興した株式会社小諸鉄工所は、錬三の技術もあって東信随一の鉄工所と言われるようになりました。

さらに、昭和四年三月、二十八歳のときに、星野温泉で水力発電所の建設が始まり、星野嘉助氏の依頼により、錬三がこれを引き受けました。職工は小諸から毎日汽車で通わせましたが、完成を急ぐために自分だけは軽井沢に滞在し続け、六月十日、ついに最新式のフランシスタービン水車の試運転が大成功を納めました。以後、錬三は星野嘉助氏から信頼を得るようになりました。

昭和六年、錬三は東京の教会にてシスターのすすめで豊恵と結婚しました（シスターは豊恵のお姉さん）。その後、作業場で頭に大けがをした錬三は運良く仕事は続けられましたが、無理して働く夫を心配した豊恵は、家族で松本へ移住し錬三を療養させる事にしました。

しかし昭和十六年、錬三は友人の仕事の手助けで満州へ渡った際、病気を患ってすぐに帰国し、松本の八盛院で療養を続けましたが、昭和十七年十月十九日、錬三は妻と4人の子を残し四十一年の生涯を閉じました。

（星野嘉助著「努力と信仰の人」より）

▲ フランシスタービン水車の発電機。中央に星野嘉助氏。右手前が錬三。（写真提供：星野リゾート様）

荘助の残した手記

▲ 荘助直筆の「小諸町東南部の発展」大正３年から大正 15 年までの経過が記されている。

荘助は大阪の天王寺付近の盛場を参考にし、鶴巻を料理飲食店や芸妓置屋で盛り立て、歓楽街として繁栄させることを考えました。その経過を「小諸町東南部の発展」と題した手記に残しています。

『小諸町与良町の南西は全て田畑で一戸の住家もなかったが、大正三年十一月鉱泉を発掘し、鶴巻鉱泉浴場の営業を開始した。道路の敷設、電話の移転、電灯の招致等に相当の苦心をし、数戸の家屋と長屋を建設したところ、他町村より移住する者が増え、大正五年九月には約三十戸を数え、その町名を鶴巻町と銘名した。大正七年には鶴巻芸妓の数二十余名、料理店、飲食店も二十余を数えた。…（抜粋）』

鶴巻の栄華のなごり

昭和の時代、鶴巻は歓楽街として大きく発展しました。

所狭しとお店が立ち並び、夜はたくさんの人とタクシーが行き交い、ネオンとともに歌声が朝まで聞こえていました。

やがて鶴巻の栄華も徐々に過去の記憶となっていきました。映画館は閉館し飲み屋ビルに変わるなど、今では、裏通りの古い看板に名残を見ることができます。

かつての賑やかだった時代は人々の記憶に残り、今も懐かしく語り継がれています。

（写真提供：中村雅之様／ブログ「風呂屋の煙突」より）

小宮山荘助の年譜

明治二年　小諸新町の齋藤家に生まれる
明治十六年　伯母の嫁ぎ先であった本家个小宮山佐市鍛冶に弟子入りし、二十歳まで修行
明治二十五年　小宮山家へ養子入りし、長女いちと結婚
明治二十九年　分家し鍛冶職人として独立
明治三十一年　長男 荘市が死亡(出生日不明)
明治三十四年　長女 うめじが生まれる
明治三十八年　次男 錬三が生まれる
明治四十年　三男 鋼三が生まれる
明治四十三年　荘助の妻いち、心臓を痛め三十二歳で急死
明治四十五年　うめじが九歳、錬三が六歳、鋼三が二歳
大正二年　かのいと再婚する
大正三年　次女 あきが生まれる
大正四年　「小宮山式大豆粕粉砕器」を考案、特許を取得(特許第一八一五八号)
大正五年　次女 あきが亡くなり、後妻かのいと離婚
大正六年　いちの妹(本家の四女)とめと再婚
大正七年　発明品博覧会に出品(大阪天王寺へ)
大正九年　与良裏鶴巻地籍に工場を建てた際、大量の水が出て、のち鶴巻鉱泉浴場を開業
大正十年　三女 あいが生まれるも死亡
大正十二年　四男 新(しん)が生まれる
大正十四年　二間半道路を拡張して鶴巻町とする
昭和二年　初代鶴巻区長となり、住戸建築に尽力
昭和五年　五男 金雄が生まれるも死亡
昭和十三年　六男 武が生まれる(のち戦死)
株式会社鶴巻館を設立して活動写真館(のちの小諸キネマ倶楽部)を開館
七男 鋭七郎が生まれる
四女 日出子が生まれる
五女 文子が生まれる
八男 昭三が生まれる
南町に株式会社小諸鉄工所を設立(顧問役に小山邦太郎氏)
町会議員三期、鶴巻区長を歴任
十一月五日 荘助逝去(享年六十九歳)

小諸での出来事

明治四年　小山久左衛門、御牧ケ原の開墾開始
明治五年　東京鎮台上田分営、小諸城受取り
明治八年　マッチ・ランプが普及し始める
明治二十一年　鉄道開通により小諸停車場、営業開始
明治二十二年　小諸は正式に小諸町となり、官選戸長を廃し町会選出の町長となる。初代小諸町長に西岡新信義を選任
明治二十四年　鉄線の吊橋、大久保橋開通
明治二十六年　浅間山大噴火、降灰あり
明治三十二年　小諸義塾開塾、塾長木村熊二、塾舎は耳取町佐藤知敬方
明治三十三年　島崎藤村、小諸義塾の教師となる
明治三十五年　浅間山大爆発、降灰東京まで達す
皇太子殿下、五月二十一日三時・三十一日十二時半御通過、全町民停車場で送迎する
明治三十八年　島崎藤村「破戒」前半の稿を抱き、小諸義塾を辞して上京
明治四十年　小諸を初めて自動車が通過する
明治四十三年　若山牧水、小諸に滞在
大正四年　佐久鉄道(現小海線)、小諸ー中込間開通
大正六年　赤坂から鶴巻までの新道、開通
大正九年　渋沢栄一、小諸小学校にて講演
昭和元年　布引電気鉄道設立
懐古園、本田博士の設計で形を整え動物園などができる
昭和八年　鉄骨の吊橋、大久保橋竣工
昭和十一年　「布引山釈尊寺観音堂宮殿」国宝に指定(昭和二十四年五月国の重要文化財に指定)
昭和十三年　第九代小諸町長に小山邦太郎氏就任

(小諸市誌 近・現代篇より)

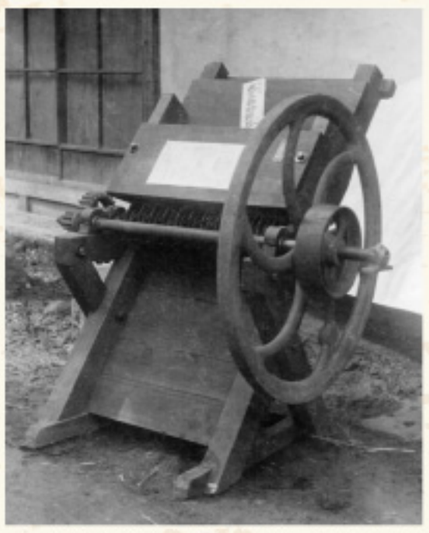
公私代表職名(昭和五年度)

▲ 大正11年4月22日撮影
荘助53歳(岩村田警察署建築上棟式にて)

小諸町第四区長
小諸町会議員
小諸鉄工所代表社員
小諸警察署管内浴場組合長
長野県連合浴場組合幹事
キネマ倶楽部活動館所有主
東京海上火災保険会社代理店
信濃工業株式会社取締役
小諸庶民組合総代兼信用評定委員
小諸警察署新築常任委員
帝国発明協会特別会員

(荘助の日記より)

信濃國小諸町
☆鍛工場 小宮山荘助



▲ 大豆粕粉砕機改造型(大正2年11月)
平ベルト用のプーリー軸が装備される。

▲ 明治44年の日記帳より社判(模写)

荘助の子ども

荘助は三度の結婚をし、あわせて13人の子どもがありました。

- 小宮山荘助
  - ＝ いち
    - 荘市
    - うめじ
    - 錬三
    - 鋼三
  - ＝ かのい
    - あき
  - ＝ とめ
    - あい
    - 新
    - 金雄
    - 武
    - 鋭七郎
    - 日出子
    - 文子
    - 昭三

荘助の日記

荘助は、明治三十一年から亡くなる間際までの約40年間に渡り、日記を書き続けています。鍛冶の注文に関する事、子どもの誕生や祝い事、遠出の旅程、来訪者、公職に関する事など、きめ細かに知ることができます。

▲ 荘助の日記帳。公私ともに多忙な様子が伝わってくる。

小宮山家の今

昭和二十七年、本家个小宮山佐市鍛冶を受け継いだ小宮山安則は、弟の友則・良治と共に南町に(株)小宮山鉄工所を設立しました。その後小諸市和田工業団地に工場を移転、社名を(株)コミヤマに変更、安則の長男幸雄が社長となった後、現在も个鍛冶に始まる物造りの精神を引き継いでいます。

練三の亡き後、妻豊恵が始めた小宮山商店(現、小諸なる小宮山酒店)は、豊恵が亡くなった後も、娘夫婦の照夫・説子へ、さらにその娘夫婦の守・順子へと受け継がれ、古き良き時代を経て、鶴巻の盛衰を見続けています。

埼玉県川口市で特殊ミラーの会社を経営する荘助の孫の栄は、得意な発明やアイデアを事業に生かし、さまざまな商品を生み出しています。特殊ミラーの特許取得は、まさに荘助の精神を今に受け継いでいます。

埼玉県川口市で社会保険労務士として小宮山労務管理事務所を開設した荘助の孫の欣一は、行政書士としても活躍。娘の敏恵と玉恵も社労士です。

荘助の息子の新は、長野高専を卒業後、東芝に入社、妻梅子との結婚後は横浜で暮らしました。現在は長男の義雄が本家との縁を繋いでいます。

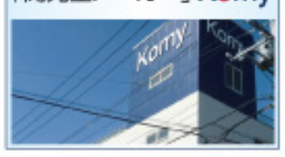
株式会社コミヤマ(小諸市和田)

昭和二十七年に設立された「(株)小宮山鉄工所」は、昭和六十一年「(株)コミヤマ」に社名変更。現在は社会基盤を支える部品を、鍛造から機械加工まで一貫生産を行う企業に発展している。

会長　小宮山喜之助
社長　小宮山完治
副社長　小宮山始

『箸技(はしわざ)』は和の伝統から生まれた箸の"技"を楽しむ競技。緊張感と達成感。脳の活性化。友達の輪が広がる!
HASHIWAZA 一般社団法人 國際箸學會 INTERNATIONAL INSTITUTE OF HASHI

おかげ様で創業53年
KomyMirror
面白そうならすぐ創る「開発型メーカー」Komy



コミー株式会社(埼玉県川口市)

孫の栄は昭和四十二年に駒込で看板業を始め、ミラー製品で国内外の特許を持つ「コミー株式会社」へと発展させた。

また、日本伝統の箸技を伝える「国際箸学会」の理事長も務める。

荘助
＝ 錬三
いち
＝ 栄
豊恵

小諸なる小宮山酒店(小諸市鶴巻)

昭和二十七年、錬三の妻豊恵が「鶴巻の湯」の隣で商店を始め、のちに酒屋となった。現在は荘助のひ孫の岩下順子がシニアソムリエとして「小宮山酒店」を営んでいる。

荘助
＝ 錬三
いち
＝ 豊恵
照夫
＝ 説子
守
＝ 順子

「小宮山荘助翁ものがたり」
発行日　令和三年九月三十日発行
発行者　小宮山照夫、小宮山栄、小宮山義雄
小宮山始、岩下順子
協力　中村雅之(風呂屋の煙突)様
星野リゾート様
神津健壽(進歩堂)様／牧野和人様
大久保保様／塩川美代子様
表紙題字　小宮山栄
制作　中村完二郎(KAN-PRO)